
書 評

Celui qui est, interprétations juives et chrétiennes

d'Exode 3・14

édité par Alain de Libera et Émilie Zum Brunn

Paris, Les Éditions du Cerf, 1986, pp. 316.

宮 本 久 雄

思索は言語の内をめぐって働く。その意味で思索は言語が拓き切る世界を自己の限界とする。その限界内で知恵が問われ、人間の生が問われる。しかしこの言語の世界に、従来と異なる言語が侵入するとき、そこは新たな思索が展開し、新たに生の意味が問われることになるであろう。ギリシア語で愛智の途に立とうとした人びとが聖書 (LXX) に出会ったときはまさにそうした言語の衝突が生じたのである。聖書はヘブル語という壮大な言語世界をにない、それをギリシア的教養 (enkyklios paideia) の言語世界につきつけたのであった。そしてこの事態は、キリスト教を媒介に愛智の探求の全歴史を通じて生じてきたといえる。聖書は殊に「存在」という言葉をめぐって如上の挑戦をなし、西欧、東方ビザンツ、アラブなどの言語・思索がこれと死闘を演じたのである。この死闘の中心に『出エジプト記』3章14節 (以下 Ex. 3・14 と表記) にまたがるテキストがあった。本書 (論文集) はマイモネデスからK・バルトまでの幾多の先人が、Ex. 3・14 について思索した軌跡を見事に浮彫りにして、この死闘の一端を窺わせてくれる。それゆえこのように広汎かつ複雑な領域にわたる諸論文の紹介にはそれだけの資格が必要であるが、今は浅学非才を承知の上であえて紹介を試みる次第である。

ところでこの紹介の稚拙さを補完するために、予め Ex. 3・13~15 の文脈を一応説明しておきたい。Ex. 3・13 において、モーシェは神（エローヒーム）に向かって名をたずねる。3・14 では、最初に「エフィエー・アシエル・エフィエー」（エフィエーは存在動詞の第一人称未完了形、アシエルは関係詞）という神名が、次に単に神名「エフィエー」が啓示される。3・15 では、この神と「アブラハム、イサーク、ヤコブの神」との同定がなされる。以上が文脈の次第である。

第一論文はM・マイモーニデス（1135~1204）がその著『迷える者への手引き』でなした Ex. 3・14 解釈を扱っている。彼は神を必然的存在とするアヴィケンナや神を思惟とするアリストテレス主義者テミスティオスに影響されつつも、結局神に関する一切の述語（存在、生命、知恵 etc.）すなわち神を思索しようとする人間の言語一切は、神そのものと全くの同名異義の関係しかもてず、その結果神には肯定命題が成立せずとして不可知論を説く。だから彼にあって愛智の仕事は専ら人間理性の限界を明らかに確定することになる。このように神存在の絶対的無形超絶主義を説くマイモーニデスに対し、逆に神存在との合一体験を願うカバラー神秘主義（第二論文）が13世紀に生じたのも無理からぬものがあった。カバラーは「スフィーロート（数）」の図式をたて、その数を宇宙の構成要素とみだてて神秘的宇宙論を説いたり、あるいはその数を神性の流出の階梯（神の属性）にみだてて神秘体験を実現しようとした。その際この数に神名が関係付けられることになる。例えばナフマニデスによれば、エフィエーは絶対的な憐れみ（数）、YHWH（主）は憐れみ（数）、Adonai（主）は裁き（数）を表わすとされ、結局神名の啓示は、歴史的現実のうちに裁きを包みこんだ神の憐れみの流入として理解されている。そうした神に人間が出くわすのである。そこに神秘体験が生ずる。以上のように神存在が、人間世界に突入するという理解の根底には、ラビ（例えばラーシ）が Ex. 3・14 の神名を「われは、汝と共に在らん」という現存の意味に理解していた伝統がある。同じ世紀にパリにおいては愛智の探究者たちがプラトン、アリストテレス研究の伝統をふまえて、着々と Ex. 3・14 の研究を進展させつつあった（第三論文）。彼らの名はサン・シエルのフーゴ、ヘイルズのアレクサンデル、ボナヴェントゥーラ、大アルベルトゥス、トーマス・アクィナスであった。これらの学匠たちは、一方で、△名を存在論的に解釈するが、他方で聖書を媒介にキリスト論的解釈の地平を切り抜いてゆく。例えば

アルベルトゥスとトマスによれば、神名は哲学的には神存在の不可把握性を、神学的には三位一体共通の存在を表わす。しかし『ヨハネ伝』8章58節によって Ex. 3・14 の神名はキリストのベルソナに帰属させられうるとする。そのとき存在は、本質主義的理解をはみ出して、^{知性}と^{意志}という言葉と密接不離な関係におかれ、さらに肉体という言葉の場面において思索されうるまでになる。同じスコラの伝統に立って存在の思索をめぐるスコトゥスは、本来の形而上学と現身にあるわれわれの形而上学の区別をする(第四論文)。知性が一切の現身の条件から免れて propter quid の仕方でも無限存在(神)を考究する本来の形而上学に比し、現身の知性が quia の証明を以て企てるわれわれの形而上学は、後天的で不確実な認識しかもたらさない。それは救いの歴史の中でアリストテレスに発する形而上学である。この形而上学には本来の形而上学における不可思議な神が、思議されているという逆説があり、それを可能にするのが一義的存在という言葉である。そしてモーシェへの神名の啓示こそ、一義的存在という言葉開披の始動なのであった。第五論文は大アルベルトゥスからシュトラスブルクのウルリヒを経てM・エックハルトにおいて頂点に達するケルン学派の思索を辿っている。殊にエックハルトは Ex. 3・14 (ego sum qui sum) における存在(sum)の反復に注目する。この反復は、存在が自己に還帰し滞留することを表わしている。それは存在の内的生命の充溢、沸騰であり、そのたぎり溢れが創造である。この存在の生命的沸騰は三位一体に外ならず、第一の sum は父を、qui は子を、第二の sum は聖霊に当てられる。かくして存在の内的生命は存在が産み、生まれ自己還帰するという三肢的構造に分節化される。ところで ego はさらに神のこの充足を表わす根源的我・神性・一性に外ならず、不可思議である。人は神のこの我と1つで在る(est)ことに呼ばれている。人の我と神の我との一致こそアウグスティヌスのいう「神における安らい」であり、そこから「何故なし」の働きが自由無礙に発するのである。このように西欧の思索において存在が一人称の言葉で語られるのはエックハルトに極まる。14世紀から15世紀にかけて Ex. 3・14 を『マタイ福音書』の主の祈りのテキスト(6.9)とつき合わせて思索しようという企てがなされる(第六論文)。例えばボマーリウス(Uten Bogaerde)は、主の祈りの読みを変えて「Pater noster qui es」と「in caelis sanctificetur nomen tuum」とを区切る。そしてこの父の存在(qui es)のうちに Ex. 3・14 の存在を洞察しつつ、存在を信心・敬虔の地平に現前するものとして頂いてゆく。第七論文は

再度ユダヤ思想（カバラーとハシディズム）に向かう。ハシディズムは日常生活のうちに魂を神に固着させ（devègut）て生きることを説く敬虔主義の一種であり、メシア主義の色彩が濃い。その聖書解釈は、16世紀のカバラー主義者ルーリアに影響されている。彼によると Ex. 3・14 は、エジプトにおけるイスラエルの子たちへの神の現存だけでなく、未来にわたる、隷属の子たちへの神の現存を開示するという。そして歴史は隷属と解放の周期に外ならず、その解放に神名が決定的役割を果たすという。18世紀のハシディスト、R・エリメクは、この解放を解放の根拠・△名に仕えることを自覚した個人^{ペルソナ}によって実現される贖罪の次元にまで高めた。このように西欧でもユダヤにおいても存在が人間の日常実践的地平にどう関わるかが問題とせられたことに注目したい。そうした思索の調子は、マールブランシュの思弁にも窺われる（第八論文）。彼はスピノザが神と世界の関係を幾何学的公理とその結論との関係にみだてて神を非ペルソナ化したことに反対した。彼によると Ex. 3・14こそ、無限存在たる神を開示し、人間精神をあらゆる有限的存在への志向（偶像崇拜）から浄め、すべてが自由な存在たる神の恵みのなす業であるとの自覚をもたらすという。スピノザやデカルトなどの静的存在理解をマールブランシュ以上に打破しようとする胎動は、シェリング（第九論文）、ドイツのユダヤ思想（第十論文）、バルト（第十一論文）を追跡するにつれ、明確になってゆく。シェリングは Ex. のうちにエローヒム（El'olam、永遠の隠れた神）が YHWH（生成した神）として啓示されたことを見出した。それは消極哲学で不動・一者と考えられていた存在が凌駕され、自己脱自したことであった。その意味で存在は存在可能であり、過去存在に対し、未来存在（das, was seyn wird）である。これこそ Ex. 3・14 の「エフィエー」の証するところである。かくて存在は自己凌駕をなす自由であり、意志に外ならない。ヘルマン・コーヘンも Ex. を吟味した後、存在を一つの自我と関係付けている。M・ブーバーは F・ローゼンツヴァイクを参照しつつ、Ex. 3・14 のうちに存在の現存性（Ich werde dasein）の意味と自由殊にエジプト的魔法（人間の概念）に閉鎖されぬ、非魔術的自由との意味を看取している。このような存在理解は、バルトの反自然神学の立場において極限に達する。彼は LXX 訳の影響をうけた、従来の存在論的抽象的神観に対し、Ex. 3・14 と『黙示録』1章8節（'Εγώ εἶμι τὸ "Ἄλφα καὶ τὸ Ω, ……ὁ ὢν καὶ ὁ ἦν καὶ ὁ ἐρχόμενος）とをつき合わせつつ、神名の非存在論化、キリスト論化を企てる。だから Ex. 3, 14 では神の固有名の開示が拒否さ

れているが、他面そこでは父と共に子が語り、歴史内で人に恵み人を救う神が伝えられているというのである。このようにバルトにあって Ex. は神秘（超越的神）とするし（キリスト）を統合した具体的神学の根底をなしている。

以上の如く、本書は神名エフィエーが、愛智の途に立つ人びとに、様々な思索と生の地平を開示してきた歩みを概説している。それらの地平は人間学、神学、神秘主義、意志哲学、敬虔主義などを包括したもので、中世哲学が孕む可能性と思索の沃野を示してくれているともいえよう。

それと共にこの神名は、存在が永遠、必然、無限、不動などの三人称的意味連関から脱自して、今ここで「わたし」に現成し問いかけていることの自覚を新たにさせてくれるものである。

Drago Pintarič: *Sprache und Trinität. Semantische Probleme in der Trinitätslehre des hl. Augustinus.*

Salzburger Studien zur Philosophie
Salzburg-München, Verlag Anton Pustet 1983, 162 S.

森 泰 男

三一論 (Trinitätslehre) は中世哲学にとっても基本的な問題の一つである。実体 (substantia) と関係 (relatio) の問題は、アリストテレス哲学とも関連して大いに議論されたところである。拙稿、「アウグスティヌス、『三位一体論』における《関係》の問題」においても述べたように、東方の三一論は従属説 (Subordinationismus) に傾きやすかった。その背後に、新プラトン主義の影響を見ることが許されるであろう。

それに対して、アウグスティヌスは三一論を根本的に考え直そうとする。すなわち、彼は神における語りに注目するのである。アウグスティヌスによれば、神は語ることに於いてみ言を生む。この生まれたみ言は生む神と一つである。この神はまた外に向かって語られる。「あれ」と語られることによって、天地万物は創られたのである。さて、言葉 (verbum) の問題は、具体的に語られることによって、言語の問題として展開する。人間は語る存在 (homo loquens) である故に、人間においても神の語りに似た働きがな